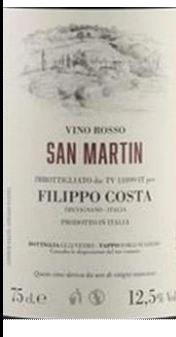
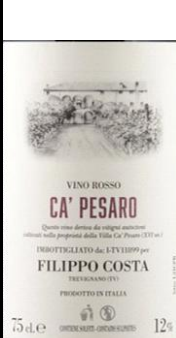
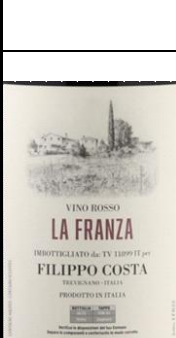


フィリッポ・コスタは、ヴェネト州アーゾロ地域の出身であり、生まれ育った土地でワインを造ることを目標に、栽培学と醸造学を学び、長年コンサルタントとして経験を積んできた。2017年、自宅の一角をセラーとして自身のワイン造りを開始。舞台となるクレスピニャーガは、かつてヴェネツィア共和国へワインを供給してきた歴史を持ちながら、産業構造の変化や病害の影響によって、その畑と土着品種は次第に忘れられていった土地である。フィリッポは、この土地の歴史を見つめ直し、「この地で昔から造られてきたワインとは何か」という問いを出発点に、土着品種だけを用了ワイン造りに取り組む。6年間にわたる試行錯誤を経て、白はビアンケッタ・トレヴィジャーナ、赤はレカルディーナへと軸足を定め、単一区画ではなく複数区画を組み合わせることで、土地よりも品種そのものの個性を表現する方向へ舵を切った。この土地が適応し、ワインとしての可能性を秘めた土着品種、そのブドウが植わる忘れられた銘醸畑の復興がフィリッポの目指すところだ。

2025	6月は最高気温38℃と異例の暑さ。7月頭にカ・ペーザロの畑で雹が降った。被害は近郊のほかの畑ほどではなかったが、約35%のブドウの損失。
2024	4月中旬に雹が降ったが、幸い大きな被害はなかった。発芽は例年に比べ早く、雨は多くはなかったが適切な時期に降った年。
2023	昨年の乾燥を取り戻すかのような有難い雨が降った年。2022年ほど暑くはなく、2021年に似た繊細でエレガントな仕上がり。
2022	雹が降り、乾燥もしていた年で、ワインはふくよかで見えるが、塩味と緊張感のある、とても興味深いヴィンテージ。

○IGT Colli Trevigiani - Bianchetta Trevigiana コッリ・トレヴィジャーニ ビアンケッタ・トレヴィジャーナ				備考
	畑	品種：ビアンケッタ・トレヴィジャーナ100% 植樹：2018、1940、1970年 位置：140～200m、南向き 土壌：火打石を含む赤土粘土壌、石灰質の礫岩を含む粘土砂質土壌	醸造	
			ステンレスタンクで2日間マセレーション ステンレスタンクで1年間熟成	その品種の登録が完了したこと（品種名をエチケットに書けるようになった）、セラーの建設やそれに伴う醸造の変化などの理由からビアンケッタ・トレヴィジャーナに注力した白ワインを生産することにした。主体となる畑は石灰質の礫岩を含む粘土砂質土壌である、カ・ペーザロの畑。
○Ca' Pesaro Bianco カ・ペーザロ・ビアンコ				備考
	畑	品種：ビアンケッタ・トレヴィジャーナ95%、ラッピオーザ5% 植樹：2018年 位置：標高140m、南向き 土壌：石灰質の礫岩を含む粘土砂質土壌	醸造	
			ステンレスタンクで2日間マセレーション ステンレスタンクで8～9か月間熟成	カ・ペーザロとは、16世紀にヴェネツィアのペーザロ一家が住んでいた別荘の名前で、クレスピニャーガのすぐ北、アソラーニ丘陵の麓に位置する。フィリッポは、この別荘のすぐ目の前にある畑を1ha借りて、栽培している。何世紀にもわたりこの丘陵地帯で生きてきたヴェネツィア人一族を偲んでこの名前をつけた。
○La Franza Bianco ラ・フランツァ・ビアンコ				備考
	畑	品種：ビアンケッタ・トレヴィジャーナ主体、グレーラ、ラッピオーザ 植樹：1940年、1970年 位置：標高200m、南向き 土壌：火打石を含む赤土粘土壌	醸造	
			ステンレスタンクで2日間マセレーション ダミジャーナ（54Lガラス瓶）で8～9か月間熟成	ラ・フランツァとは、トレヴィーゾの北西、クレスピニャーガという自治体にある丘の名前。1717年のヴェネツィアの登記簿台帳でも確認できる地名で、ヴェネツィア共和国のためにワインを造ってきた歴史ある土地。1980年代までは見渡す限りブドウ畑だったが、産業の発達やフラヴェシェンツァ・ドラータという虫により衰退してしまったブドウ栽培を、フィリッポは復興させようと邁進している。この地で昔から栽培されてきた固有品種のブレンドだが、そのなかでもフィリッポが気に入っているビアンケッタ・トレヴィジャーナの品種割合を年々増やしている。

	● IGT Veneto - Recaldina ヴェネト レカルディーナ			備考	その品種の登録が完了したこと（品種名をエチケットに書けるようになった）、セラーの建設やそれに伴う醸造の変化などの理由からレカルディーナに注力した赤ワインを生産することにした。2024年現在レカルディーナを単一で瓶詰めしているのはフィリップ・コスタのみ。 主体となる畑は火打石を含む赤土壌である、ラ・フランツァの畑。
	畑	品種：レカルディーナ100% 植樹：1930, 1955, 2008, 2019年 位置：140～370m 土壌：火打石を含む赤土壌、コングロメラート（石灰岩の礫）が特徴の石灰質土壌、石灰質の礫岩を含む粘土砂質土壌	醸造		
	● San Martin サン・マルティン			備考	ラ・フランツァの畑から南西に500mほど行った小高い丘にある、斜面の急な0.6haの畑。ラ・フランツァとは異なるアージロ自治体に属す畑で、2022年から借り始めた。 ラ・フランツァが粘土質なのに対して、より粒子の荒く、ゴロゴロとした石灰岩が特徴の、コングロメラートと呼ばれる土壌。比較的骨格はやわらかく、塩味の伴う仕上がりになる。
	畑	品種：レカルディーナ100% 植樹：2008年 位置：標高300-370m、南向き 土壌：コングロメラート（石灰岩の礫）が特徴の石灰質土壌	醸造		
	● Ca' Pesaro Rosso カ・ペーザロ・ロッソ			備考	カ・ペーザロとは、16世紀にヴェネツィアのペーザロ一家が住んでいた別荘の名前で、クレスピニャーガのすぐ北、アゾラーニ丘陵の麓に位置する。 フィリップは、この別荘のすぐ目の前にある、一部樹齢60年を超える古木の植わる畑を1ha借りて、栽培している。何世紀にもわたりこの丘陵地帯で生きてきたヴェネツィア人一族を偲んでこの名前をつけた。 2022VTはレカンティーナ100%で醸造し、マセレーションとタンク熟成期間は前年に比べ長めとなった。レカルディーナでのワイン造りに注力するため、2022がラスト・ヴィンテッジとなった。
	畑	品種：レカンティーナ主体、ペーコロ・スクーロ 植樹：1960年、2018年 位置：標高140m、南向き 土壌：石灰質の礫岩を含む粘土砂質土壌	醸造		
	● La Franza Rosso ラ・フランツァ・ロッソ			備考	ラ・フランツァとは、トレヴィーゾの北西、クレスピニャーガという自治体にある丘の名前。1717年のヴェネツィアの登記簿台帳でも確認できる地名で、ヴェネツィア共和国のためにワインを造ってきた歴史ある土地。 1980年代までは見渡す限りブドウ畑だったが、産業の発達やフラヴェシエンツァ・ドラータという虫により衰退してしまったブドウ栽培を、フィリップは復興させようと邁進している。 自身が現在レカルディーナを栽培している唯一の生産者であると、フィリップはいう。
	畑	品種：レカルディーナ100% 植樹：1930年、1955年、2019年 位置：標高220m、南向き 土壌：火打石を含む赤土壌	醸造		